

初期関係構築における顔文字使用とフェイス欲求

Usage of face marks and face wants in early relation building

伊東昌子
Masako Itoh

常磐大学
Tokiwa University
masakoit@tokiwa.ac.jp

Abstract

This study examined message-receiver's politeness perception when they received a mobile-mail message in which face marks were used. Independent variables were number of face marks and same/opposite sex between sender and receiver. Evaluation adjectives were selected in terms of positive face wants and negative face wants. The participants were undergraduate students and the message was sent by a person whom the receiver newly met with his or her friend. When the message has no face marks, the perceived impression was polite and sincere. In case of a few face marks, the impression was intimate and charming. In case of many face marks, though the impression is still intimate, it was, at the same time, somewhat annoying. The degree of feeling unpleasantness correlated with the receiver's usual style of using face marks.

Keywords — Mobile communication, undergraduate students, politeness

1. はじめに

他者と社会的な関係を築き始めたとき、比較的気軽な私的メッセージのやり取りを行う場合でも、私たちは表現に少なからず気を使う。滝浦(2008)[1]が「人に話しかけるときは言葉で他者に触れることである p. 26」と述べているように、相手に近づきすぎず、しかし堅苦しくもない表現の生成は難しいものである。このような表現の配慮を行う背景として、社会的相互行為を展開するときの基本的欲求としてフェイス欲求がある。

Brown and Levinson (1987[1978])[2]は、社会的相互行為を続けようとするときに、双方が配慮すべき個人の基本的欲求として、ポジティブフェイスとネガティブフェイスを提唱した。ポジティブフェイスは、相互行為を行う相手に受け入れられたい、共感してほしい、影響を与えることができ近くありたいという欲求である。一方、ネガティブフェイスは、他者に踏み込まれたくない、距離を

おきたい、自由でいたいという欲求である。この相反する欲求は同時に働く。会話を展開する双方には、互いにフェイスを脅かさないように表現生成を行うスキルが要求される。言うまでもなく、そういった配慮の重要性や不均衡性は、双方の関係性や場の社会性あるいはメッセージ内容に影響を受けるであろう。適切な配慮が感知されない場合は、受け手は受け取ったメッセージに対しても送り手に対しても、不快な印象を抱くと考えられる。本研究では、近年私的なメッセージのやり取りに散見される顔文字の使用と受け手がメッセージ文に抱く印象の関係を、フェイス欲求の観点から検討し分析した。

顔文字とは、(^_^)/や(>_<)のように顔の表情に類似したシンボルであり、文字や記号を組み合わせて作成したものである。主にメール文の文末に使用され、感情を表出する目的で置かれる(荒川・鈴木, 2004[3])。顔文字に関する研究としては、1) 感情表出としての顔文字使用がメッセージ内容の伝達に与える影響を調べたもの(荒川・鈴木, 2004[3]; 高橋・深田・秋光, 2005[4])、2) 相互行為相手との関係性あるいは関係構築における配慮と顔文字使用の関係を調べたもの(高木, 1993[5]; 荒川, 2004[6]; 西尾, 2004[7]; 原田, 2004[8]; 三宅, 2012[9])、3) 使用される顔文字の意味表出面の種類を分析したもの(戸梶, 1997[10])、4) 顔文字それ自体の知覚される意味を調べたもの(川上, 2008[11])、5) 使用される顔文字の日米比較を行ったもの(カヴァナ, 2012[12])、さらに6) 文脈に適合する顔文字の推奨技術開発(卜部・ジェプカ・荒木, 2013 [13])などがある。

本研究は上記2に位置し、関係構築の初期に相手に送るメッセージ文に使用される顔文字の頻度

が受け手が抱く印象に与える影響を、フェイス欲求の観点から解明する。顔文字はメッセージ文の送り手の感情を表出する働きがあり、その使用や頻度はポライトネス理論[2]におけるモダリティ機能、具体的には感情表出の程度が受け手への距離の置き方を指標すると推察される。荒川 (2004) [6]によれば、メッセージ文の受け手を自分の近くに引き寄せようとするときは顔文字が使用され、親しく振舞いすぎる相手には顔文字を使用せず距離を広げようとするという。このように、顔文字はその方略的使用により、関係構築における送り手の意志を暗示する機能を持つ。このような方略的使用の背景には、顔文字による感情的自己開示が、メッセージ文の受け手のポジティブフェイスにプラスの印象を与えるとの送り手の予期があると考えられる。

顔文字の方略的使用に関しては、ポライトネスに関わる問題の他に、メッセージ文に顔文字が入ることによる楽しさの演出面もある(荒川, 2004[6]; 三宅, 2012[9])。顔文字を使用する楽しさや、受け取ったメッセージ文に文字だけが書かれているよりも装飾的な楽しさを感じることもある。このような使用は絵文字としての使用に近いと思われる。

従来の顔文字使用と受け手への配慮の関係を調べた研究では、顔文字の使用頻度を問題にしていない。顔文字が送り手の心情を開示する機能や装飾機能があるのであれば、過度な使用は、受け手のポジティブフェイスへの配慮としてはプラスであっても、受け手のネガティブフェイスにとってはマイナスの印象になると推察される。本研究ではこの点を調べるために、社会的に同等の大学生同士のメールによるメッセージ文のやりとり事態で顔文字使用の頻度を変化させ、受け手に与える印象をフェイス欲求に関連させて測定することを第一の目的とする。顔文字が使用されたメッセージ文の印象については、送り手が男性か女性か、さらに受け手が送り手と同性か異性かによって影響を受けると推察される。この点を考慮して印象を測定することが

第二の目的である。

次に、顔文字が使用されたメッセージ文の印象は、受け手が普段顔文字を使用するかどうかにも影響を受けると考えられる。なぜなら、小林 (2004) [14]が、現代方言は言語体系というよりも仲間を強調するスタイルとして使用されると指摘したように、顔文字使用も一種のスタイルと考えられる。この点は荒川 (2004) [6]も指摘している。顔文字使用が一種の方略的使用スタイルであれば、それを使用しないスタイルの人にとっては、顔文字が多用された文は、好ましくない印象になるであろう。この点を考慮して、受け手の普段の顔文字使用とメッセージ文の印象の関係を調べるのが、第三の目的である。

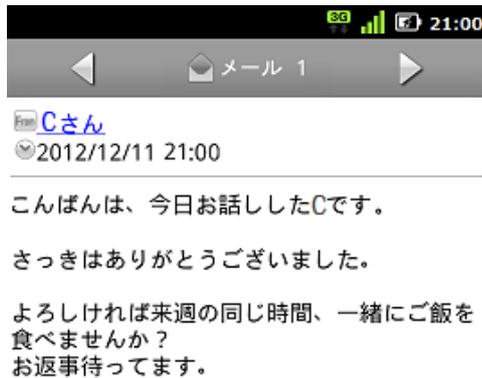
顔文字は自分から使用するだけでなく、相手に合わせて使用する場合もある。ただし、どのような場合にどの程度相手に合わせるかについての調査報告はいまだ提供されていない。そこで、第四の目的として、顔文字の使用頻度が異なるメッセージ文に対する返事文に顔文字がどの程度使用されるかを調べる。

2. 方法

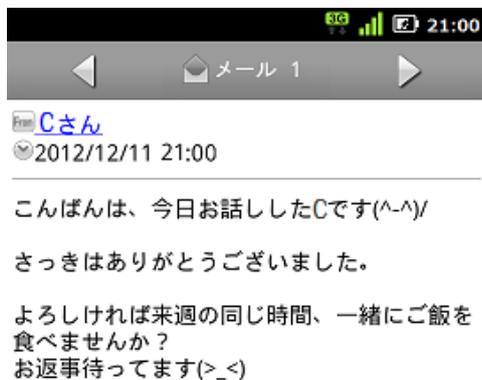
参加者 電子メール経験のある大学2年生から4年生70名(男子31名, 女子39名であった)。

刺激材料 状況設定としては“大学でお昼に友人を通して知り合い、少し会話をした相手から夜に携帯電話上でメールが届いた”である。メッセージ文の原型は、「こんばんは、今日お話しした〇〇です。さっきはありがとうございました。よろしければ来週の同じ時間、一緒にご飯を食べませんか?お返事待ってます。」という挨拶に続く4文から成る。顔文字の種類としては、戸梶 (1996) [6]を参考にして、第一文には宣言や主張をする(^_^)、第2文にはうれしさを表す(^o^)、第3文には食事に誘うことに少し恐縮する意味として(^_^;)、第4文には返事をもらえるかどうかの不安を示す(>_<)を使用した。顔文字使用に関する条件は、使用しない顔文字無し条件(図1a)、最初と

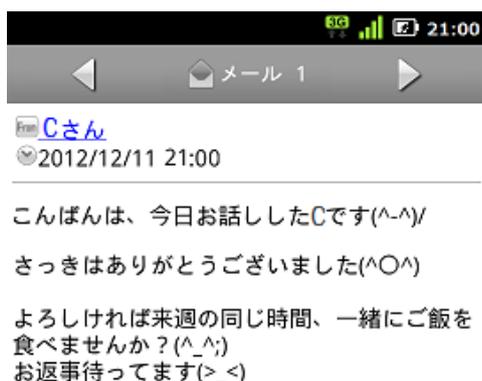
最後につける顔文字少数条件（図1b）、文毎に使用する顔文字多用条件（図1c）であった。



a 顔文字無し条件



b 顔文字少数条件



c 顔文字多用条件

図1 顔文字使用に関する刺激条件と刺激

印象評定項目 受け手のポジティブフェイスにとってプラスの印象がある形容詞として「親しみ

やすい」「愛嬌がある」「近づきやすい」、ポジティブフェイスにとってマイナスの印象がある形容詞として「堅苦しい」「よそよそしい」を採用した。受け手のネガティブフェイスにとってプラス印象がある形容詞として「礼儀正しい」「真面目」、ネガティブフェイスにとってマイナスの印象がある形容詞として「うっとりしい」「ずうずうしい」「子供っぽい」を採用した。上記10個の形容詞の他に、「不快」を採用した。これは仮に愛嬌があり近づきやすいと判断されたとしても、使いすぎていると感じる場合は不快感が生じるからである。表現としての印象と関係構築時の不快感は別の心情であると思われる。評定点は「とてもそう思う：6」「そう思う：5」「少しそう思う：4」「あまりそう思わない：3」「そう思わない：2」「まったくそう思わない：1」の6段階である。

手続き 集団実験である。参加者には質問紙が配布された。質問紙は、表紙と設問用紙8枚（各顔文字条件×送り手が同性あるいは異性（6枚）、返事における顔文字使用を問う設問用紙（1枚）、普段の顔文字使用を問う用紙（1枚））であった。

印象評定の教示文は以下のとおりである。「あなたは友人のAさんを通じて、同い年で同性のBさん（異性のCさん）と初めて知り合いました。B（C）さんとはお互いに軽い自己紹介をし、Aさんも交えて15分ほど会話をしたのち、メールアドレスの交換を行いました。その日の夜、B（C）さんから食事のお誘いメールが送られてきました。メール内容は、画像のとおりです。このメッセージ文の印象について、各形容詞項目の当てはまる評定値に○をつけてください。」

各々のメッセージ文に返事を書くときに顔文字を使用するか否かについては（7ページ目）、送り手が同性か異性かに分けて、「顔文字無し」、「少量使用する」「多用する」のいずれかを選んでもらった。普段のメールにおける顔文字使用に関しては（8ページ目）、「使用しない」「少量使用する」「多用する」のいずれかを選んでもらった。

3. 結果

図2は、受け手（参加者）が男子の場合で、送り手が同性あるいは異性の場合の、各顔文字使用条件におけるメッセージ文の印象である。図3は受け手が女子の場合である。10個の形容詞の評定値については、ポジティブフェイスにとってプラスの印象は「P+」、ポジティブフェイスにとってマイナスの印象は「P-」、ネガティブフェイスにとってプラスの印象は「N+」、ネガティブフェイスにとってマイナスの印象は「N-」として合算した上での平均値である。「不快」についてはそれ自体の平均値である。評定値が3を超えて高くなるほど、各指標に相当する印象が強くなる。

顔文字無しの条件においては、受け手が男子の場合も女子の場合も、送り手が同性・異性にかかわらず、N+（礼儀正しく真面目な印象）が評定値5を超えており、ネガティブフェイス欲求にとって好ましい印象である。不快感も認められない。顔文字少数使用の条件においては、受け手が男子の場合も女子の場合も、送り手が同性・異性にかかわらず、P+（親しみやすさ、近づきやすさ、愛嬌がある）が4を超えている。女性が送り手の場合は評定値が5に近い値となり、ポジティブフェイス欲求にとって好ましくなる。また、N+の評定値は3を超えて礼儀正しさが保たれており、

不快感もない。

顔文字多用の条件においては、受け手が男子の場合も女子の場合も、女子が送り手であればP+は評定値4を超え、ポジティブフェイス欲求にとって好ましい印象がある。N-（うっとろしい印象）がわずかに3を超えるが、不快感には認められない。一方、顔文字を多用したメッセージ文の送り手が男子である場合、受け手が男子でも女子でも、N-の値と不快感が評定値3を超えて4に近づく。P+は4であるものの、同時に不快感が生じている。

顔文字が多用されたメッセージ文において不快感が認められたので、その条件の不快感の程度と受け手が普段顔文字を使用する程度の相関分析を行った。“普段使用しない”を1、“少数使用”を2、“多用”を3として、不快評定値との関係を分析した。その結果、同性に対しては $r=-.21$ で有意傾向が認められた（ $p=.09$ ）。異性に関しても $r=-.23$ で有意傾向が認められた（ $p=.06$ ）。したがって顔文字を普段使用しない受け手が顔文字を多用したメッセージ文を受け取った場合、本実験の文脈（友達に紹介された相手との関係構築初期）では、不快感を生じさせがちである。P+ではあるが、不快感も生じることがわかる。

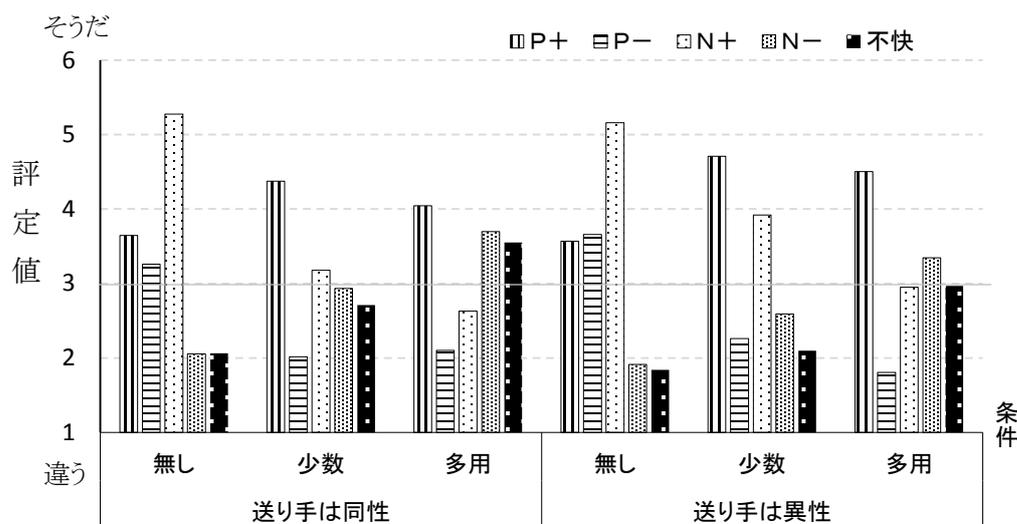


図2 受け手は男子:各顔文字使用条件における送り手メッセージの印象 (P+: ポジティブフェイスにとってプラス, P-: ポジティブフェイスにとってマイナス, N+: ネガティブフェイスにとってプラス, N-: ネガティブフェイスにとってマイナス)

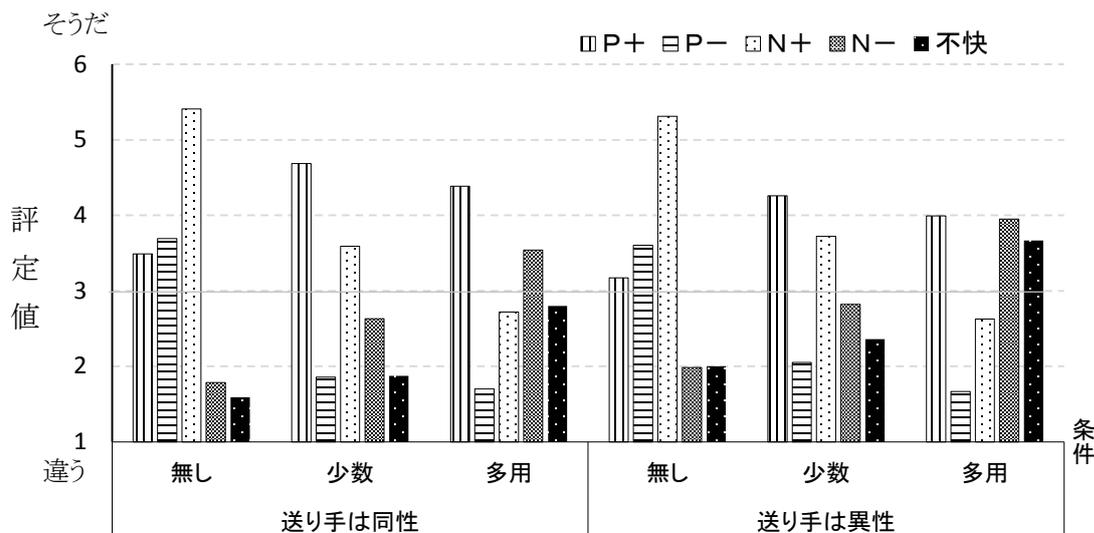


図3 受け手は女子:各顔文字使用条件における送り手メッセージの印象
 (P+: ポジティブフェイスにとってプラス, P-:ポジティブフェイスにとってマイナス,
 N+: ネガティブフェイスにとってプラス, N-:ネガティブフェイスにとってマイナス)

表1は、メッセージ文に対して受け手が返事を書くときの顔文字使用を示した。顔文字が無いメッセージ文への返事の場合、男子の受け手においては、同性の送り手に対しては、7割が顔文字を使用しない。異性の送り手には、使用しない場合と少数使用の場合がほぼ半数ずつになる。女子の受け手においては、送り手の性別にかかわらず、使用しない場合と少数使用する場合がほぼ半数ずつになる。

送り手のメッセージ文に顔文字が少数使用されている場合、男子の受け手においては、送り手の性別に関わらず、ほとんどが顔文字を少数使用する。女子の受け手においては、同性の送り手には使用しない場合と少数使用の場合がほぼ半数ずつになり、異性に対してはほとんどが少数使用する。一方、送られてきたメッセージ

文に顔文字が多用されている場合、送り手の性別に関わらず、返事文に顔文字を少数使用し、多用はしない。顔文字は、相手に合わせて使用する場合もあると思われるが、本実験のように、大学生同士の関係構築の初期では、顔文字の多用はさけているようである。

4. 考察

本研究では、大学生同士における関係構築の初期において、携帯メール上で顔文字を使用したメッセージ文の印象を、使用される頻度とフェイス欲求に関わる印象の観点から調べた。また、送り手が男子か女子か、同性か異性かについても検討した。さらに、受け手の普段の顔文字使用の程度と印象との関係、そして返事文に使用する顔文字の頻度を調べた。

表1 送り手の各顔文字使用条件に対して返事を書く場合の顔文字使用

メッセージ文	返事文	受け手である男子の返事文						受け手である女子の返事文					
		送り手は同性			送り手は異性			送り手は同性			送り手は異性		
		無し	少数	多用	無し	少数	多用	無し	少数	多用	無し	少数	多用
顔文字の使用条件	無し	0.68	0.29	0.03	0.55	0.45	0	0.49	0.51	0	0.59	0.41	0
	少数	0.26	0.71	0.03	0.10	0.87	0.03	0.49	0.51	0	0.10	0.90	0
	多用	0.16	0.81	0.03	0.10	0.80	0.10	0.03	0.69	0.28	0.13	0.80	0.07

結果として、少量の使用は親しみやすく近づきやすく愛嬌がある印象になり、不快感はない。しかし多用すると、親しみやすく愛嬌がある印象ではあるものの、送り手が男性の場合は受け手の性別に関わらず不快感を抱き始める。また、不快感は受け手が普段顔文字を使用する程度と相関する傾向があった。ポジティブフェイスにとってプラスの印象であっても、同時にネガティブフェイスにとってのマイナス感、具体的には不快感が引き起こされることを示すことが出来た。送り手が男性の場合、顔文字を多用したメッセージ文を送ると、受け手の性別に関わらずうっとうしくずうずうしく子供っぽい印象を引き起こす理由については、自己開示の行き過ぎが原因であると思われるが (Derlega, Metts, Petronio, and Margulis, 1993[15]; 古谷・板田・高口, 2005[16]), そのような心情が生起する詳細なメカニズムの解明は今後の課題である。

受け手の普段の顔文字使用の程度と送り手がメッセージ文に顔文字を多用したときの不快感の程度が有意な相関を示す傾向にあることは、顔文字使用の暗黙のルールが言語体系というよりも使用スタイルとしての面が強いことの表れであろう。このスタイルの差が、フェイス欲求に抵触する一因となることが示唆された。返事文における顔文字使用に関しては、ほとんどの受け手が少数の使用にとどめていた。実際には内容の影響を受けると考えられるが、自己開示シンボルを節度ある頻度で使用することで、親しみを表しつつ礼儀を保とうとする意図を示すと推察される。今後は顔文字の使用スタイルがどのような心理的要因と関係するかを明らかにしたい。

参考文献

- [1] 滝浦真人 (2008). ポライトネス入門 研究社
- [2] Brown, P. & Levinson, S. C. (1978, 1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- [3] 荒川歩・鈴木直人 (2004). 謝罪文に付与された顔文字が受け手の感情に与える効果 対人社会心理学研究, 4, 128-133.
- [4] 高橋佳子・深田博己・秋光恵子 (2005). 携帯メールにおける送り手の顔文字付与が受け手の不安に及ぼす影響 広島大学心理学研究, 5, 93-107.
- [5] 高木條治 (1993). パソコン通信におけるフェイスマークの機能 日本語学, 12, 63-74.
- [6] 荒川歩 (2004). 顔文字をいつ使用するかについての語りとその質的分析 同志社心理, No. 51, pp. 17-26
- [7] 西尾知子 (2004). 顔文字と他人への関心との関係について 臨床教育心理学研究, 30, 126.
- [8] 原田登美 (2004). 「顔文字」による日本語の円滑なコミュニケーションー「配慮」と「ポライトネス」の表現機能ー 言語と文化, 8, 205-224.
- [9] 三宅和子 (2012). ケータイの絵文字ーヴィジュアル志向と対人配慮ー 日本語学, 31(2), 14-24.
- [10] 戸梶亜紀彦 (1997). コンピュータ上でのコミュニケーションにみられる情報表現に関する研究ー情緒表現記号の使用方法についてー 広島県立大学紀要, 8, 125-138.
- [11] 川上正浩 (2008). 顔文字が表す感情と協調に関するデータベース 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 7, 67-82.
- [12] カヴァナ, B. (2012). 英語, 日本語におけるオンライン・コミュニケーションの対象分析ーUMCを中心にー 青森保健大雑誌, 13, 13-22.
- [13] ト部有記・ジェプカラファウ・荒木健治 (2013). 顔文字の表す感情を用いた顔文字推薦システムの構築 言語処理学会第19回年次大会発表論文集, 648-651.
- [14] 小林隆 (2004). アクセサリーとしての現代方言 社会言語科学, 7(1), 105-107.
- [15] Derlega, V. J., Metts, S., Petronio, S., and Margulis, S. (1993). *Self-disclosure*. Newbury Park, CA.: Sage.
- [16] 古谷嘉一・板田桐子・高口央(2005). 友人関係における親密度と対面・携帯メールの自己開示との関連 対人社会心理学研究, 第5号, pp. 21-29